

徐志摩とケンブリッジ

－ ロジャー・フライとの交流を中心に －

星野 幸代

徐志摩（現代中国語ローマ字標記では Xu Zhi-mo、留学中は Hsu Tsemou と記す。1897-1931、詩人、散文家）は、1921年春～22年10月ケンブリッジ大学の聴講生であった。この約一年半のケンブリッジ留学が徐志摩を詩人として方向づけたことは、彼の手記によって広く知られている。¹ ケンブリッジで徐志摩はG・L・ディキンソン、バートランド・ラッセルをはじめ、多くの英国知識人と知り合った。その一人にブルームズベリー・グループ²の美術評論家ロジャー・フライ（Roger E. Fry, 1866-1934）がいる。

P・ロレンスは英文学・美学研究者の立場から、フライと徐志摩との交流を中国における美学という分野創設の契機として位置づけている。³ 筆者もロレンスの見解に賛同するものであるが、ロレンスの著作は二十世紀前半の中国文壇とブルームズベリー・グループとの交流について網羅的に把握し分析することに主眼を置いているため、個々の事例の一つであるフライと徐志摩については徐の書簡と梁錫華著『徐志摩新伝』⁴に拠るのみで具体的な事実を検証することはなく、また徐志摩を中国知識人の代表として時代の大きな流れを論じ、彼自身の美術方面に関する活動を落としている。

本稿ではロジャー・フライと徐志摩との交流を、徐の手記以外の資料をとりいれつつ出来るだけ明らかにする。その上で、徐志摩の中国における美術普及活動にフライが与えた影響を考察しようとするものである。

なお、本稿で引く徐志摩の文章は特記するもののほかは商務印書館香港分館総合編集部編『徐志摩全集』全5巻（上海書店、1988、以下『全集』と略す）および同編集部編『徐志摩全集補編』全4巻（同、1994、以下『補編』と略す）によった。

1. 徐志摩とケンブリッジ

ケンブリッジ！汝は永遠にわが心が恋い慕う地なり！ - 徐志摩「康橋再会罷
[さらばケンブリッジ]」(1925年発表、『全集』1巻所収)

1.1. ケンブリッジ留学まで

徐志摩は浙江省海寧県の有力な資本家の長男として生まれた。彼の初等中等学齢期は中国で近代的学校制度が整えられていく過程と重なったため、彼は当時としては最高レベルの教育を享受することになる。⁵ 徐志摩は中学(14歳ごろ)ですでに、週に会話3、リーダー3、文法2計8コマの英語教育を受けていた。ただし全て中国人教師であつたらしい。⁶ 次にミッション系の Shanghai Baptist College へ、続いて北洋大学へ進む。両校とも外国語教育には外国人教員が当たっていた。

徐志摩の受けた美術教育についてはあまり分らないが、中学では週1コマ図画の授業があり、毛筆画の外に鉛筆デッサンの指導も受けていた。⁷

1918年徐志摩は私費留学生として米国クラーク大学に向かう。この動機は定かではないが、ミッション系のカレッジで学び、また大学時代に師事した梁啓超(1873-1929)、義兄などの影響で⁸ 徐志摩は西洋指向に傾き、第一次大戦の打撃が比較的少ない米国留学に至ったのではないか。同年米国で徐志摩は第一次大戦の終結を見る。

クラーク大学で徐志摩は歴史学を専攻、一年で学士をとるため補修講座を受け、翌1919年彼は卒業資格を得た。続いてコロンビア大学大学院に転学し、1920年夏に論文「中国婦女の地位を論ず」で文学修士号を得た。その年の9月、徐志摩は英国へ向う。その動機はバートランド・ラッセルに師事するためであった。⁹ しかし折あしくラッセルは海外講演旅行中で、やむなく徐志摩は London School of Economics の聴講生となる。その秋、国際連盟協会の中国代表としてロンドン滞在中の政治家林長民(1877-1922)と知り合い、国際連盟協会に出席していたG・L・ディキンソン(1862-1932)に紹介された。ディキンソンはケンブリッジ大学のフェローであり、キングズ・カレッジの聴講生として徐志摩を迎えてくれた。

1.2. ケンブリッジとの出会い

徐志摩は「吸煙与文化 [喫煙と文化] (四)」(1926 年執筆、『全集』4) で次のように述べている。

私がケンブリッジにあった日々は実に幸せで、一生のうちでもあれほど素敵な機会はもう得られないだろう。ケンブリッジが私にどれほど学問を与えてくれたとか、何かを会得させてくれたなどとは敢えて言わない。ケンブリッジの洗礼を受けた者は気力が変わり、凡人から生まれ変わるのだなどとは敢えて言わない。ただ - 私個人についていえば、私の目はケンブリッジに開かれ、私の知識欲はケンブリッジに発動され、私の自我はケンブリッジによって芽生えたのだ [p.132]。

以上のように、徐志摩はケンブリッジで変わった自分について漠然としか述べていない。しかし、同じく二年間留学したにも関わらず彼の生き方にほとんど影響を与えなかった米国留学と比較すると、ケンブリッジで徐に何が起きたか、推測できそうである。

アメリカで私が励んだのは受講し、答案を埋め、ガムをかみ、映画を鑑賞し、賭け事をする事だった。ケンブリッジで励んだのは散歩、ボート漕ぎ、自転車乗り、喫煙、雑談、五時のお茶とパンケーキ、読書だ。・・・私はアメリカでは利口になれなかったにしても、ケンブリッジの日々には自分が実は正真正銘の愚か者だったことを少なくとも悟った。この違いは大きい [「・・・」は星野略。以下同じ] (「吸煙与文化」 前掲、p.132)

徐志摩が勉学に励んだのは寧ろ米国にいたときで、ケンブリッジでは運動と交際とに時間を費やしたことが分かる。さらに徐志摩は「我所知道的康橋(四)」(注9 参照) で、Cam 河畔からケンブリッジ大学建築群にかけての景観の美しさを描写したあと、次のように述べている。

私にはあのときふんだんに閑暇があり、自由があり、全くの孤独という機会があった。奇妙なことだが、ついに初めて私は星月の光を、草の青さを、花の香りを、流れる水の深さを認識した [pp.144-145]。

米国では徐志摩は中国人留学生の会に活発に出入りしていたのに反し、ケンブリッジでは呼び寄せた妻とも半年後に離婚し独居を始めた。¹⁰ 都会から離れた田園での孤独な思索と、知的刺激のある閑談とが詩人徐志摩を目覚めさせたと言えよう。

2. ロジャー・フライと徐志摩

ロジャー・フライはケンブリッジ大学キングズ・カレッジを1885年卒、在学中にG・L・ディキンソンの盟友となった。¹¹ 画家を志し、1906-10年ニューヨーク・メトロポリタン美術館に招聘されヨーロッパ顧問を勤め、美術評論家としての地位を築く。1910、1912年ロンドンで後期印象派(The Post-Impressionists)との命名はフライによる)展を主催し英国美術批評界に衝撃を与える。同時期、ブルームズベリー・グループに出入りしはじめ、ヴァネッサ・ベル(1879-1961)とは一時恋愛関係にあった。ヴァネッサ、D・グラント(1885-1978)らと後期印象派のスタイルを受けた画家を集めてオメガ工房を開く。1920年には美術評論書『ヴィジョンとデザイン』を上梓、好評を博していた。

King's College Archives にはR・フライ宛て徐志摩の英文書簡四通と年賀カード一通が保存されている。書簡四通はすべて『全集』に収録されている。年賀カードは『全集』未収、年月日不祥だが、既製印刷の英語で新年の挨拶がある下に手書きで「Loving thoughts from Tsemou Hsu」とある。

これらの書簡に沿って二人の交流を跡付けてみたい。四通を日付順に並べると以下の通りである。

- (1) 1922年8月7日付。
- (2) 1922年12月15日付、封筒付き。徐志摩の住所は北京のMorning Post(晨報館)。宛て先は7 Dalmeny Avenue, Highgate, London、フライの1918~26年の自宅である。
- (3) 1923年7月5日付。
- (4) 日付不祥。

(4) は文面とその他の状況から1928年8月11日~8月中旬と推定される(後述)。

手紙 (1) は全体としてロジャー・フライと知り合えた感動をつづっているが、その趣旨は、フライの書簡を受け取った礼である。

一節引用してみよう。

あなたの手紙に私は圧倒されました。喜びならば知っています。しかし今朝あなたの寛容なる共感が私の胸にもたらした独特の感激に比べたら！・・・私がケンブリッジに来ることができ、この楽しき日々を送っているのは彼 [G・L・ディキンソン] のおかげです。私の文学と美術に対する関心も形を為し、固まりつつあります。そしてあなたと知り合うことができました。 - あなたの広く温かい人格が私に向かって新しいヴィジョンを開き、大きく美しく高貴な思想と感覚とに向かって常にインスピレーションを与えてくれます。白状すると、常々あなたともっと会えたらと願っていました。何という喜びが、魅力が、心地よさがあなたのそばにあり、あなたの音楽的な声にあることか。

文面から、徐はディキンソンの紹介でフライと知り合い、フライと面識を持って間もなくこの手紙が書かれたらしいと読み取れよう。なお、引用しなかったが手紙の最終段落より、フライが徐志摩に何らかの「貴重なプレゼント」を贈ったことが分かる。会見の月日は不明である。1922年春から夏にかけてフライはフランスのサントロペに滞在していた。可能性として、彼がロンドンの自宅へわずかな期間戻った際、徐志摩が訪問したのであろうか。

このときのフライとの会見について徐志摩は散文「曼殊斐兒 [マンスフィールド]」(1923年、『全集』3)で言及している。徐志摩が女流作家キャサリン・マンスフィールドの家を訪問中、「フライ氏 (Roger Fry) 宅で会ったことのある Sydney Waterloo [『全集』3、p.11。正しくは Waterlow]」がやってきたという。シドニー・ウォーターロウ (1878-1944、外交官) は初期のブルームズベリー・グループの一員であったから、この文章は徐志摩がフライに会った事実の信頼度を高めていると言えよう。¹²

(2) は徐志摩が帰国してからのもので、主旨は、フライの中国講演旅行への招聘である。当時徐志摩には定職がなかったが、欧米帰りの知識人として講演に呼ばれるなか、詩や散文を発表しはじめていた。手紙によれば徐志摩はフライが「機会さえ喜んで中国へ来る気がある」と、当時北京大学学長であり美術教育を提唱していた蔡元培 (1867-1940) ら教育界の有力者に伝え、フライの招聘

への賛同を得た。バートランド・ラッセルの訪中時と同等の待遇に処すること、徐志摩が終始同行し通訳を務めること、中国画と西洋画とのジョイント展覧会を開催することなど、具体的に企画が考えられていたらしい。フライが承諾の返電を打ちさえすれば航行費を送金する、とある。

フライが兼ねてより東洋美術に関心があることを徐志摩は直接聞いていたらしく、「あなたはよくご承知ですから、東洋訪問があなたにもたらずであろうメリットを数え立てる必要はありませんね」と述べ、さらにG・L・ディキンソンにも声をかけて二人そろって来てほしいと懇願している。

当時フライはラッセル、L・ロポコヴァ [M・ケインズの妻となったバレリーナ]などの肖像画を次々と描くかたわら、翌1923年4月個展を開く準備に忙しく、恐らくこの冬から翌春にかけて自宅にはほとんど帰らなかったのではないか。

(3) によれば徐志摩はフライの手紙を受け取ったばかりだが、それは訪中について何の言及もなかった。徐志摩は手紙(2)が未配であったのかと落胆し、再度招聘の内容をつづっている。また、「贈ってくださった reprint は素晴らしく良かったです。風景画は驚くべき完成度です。プロバンスの巨匠に匹敵するほどの価値があります」とあり、フライが徐志摩に恐らく自作の複製画を贈ったことが分かる。

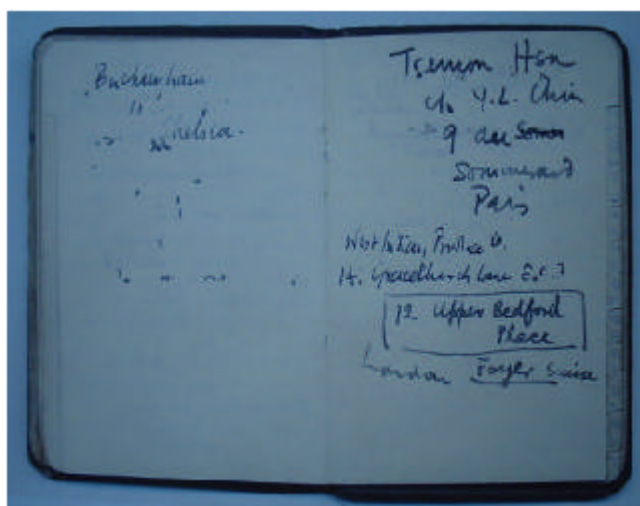
実は1923年4月に開かれたフライの個展は、彼の美術評論家としての高い鑑識眼に引き比べ非常に劣ると、イギリスの絵画批評界に酷評されていた。この失敗に傷心していた最中のフライにとって、絵画に対して素人である徐志摩の賛辞が心地よくは響かなかつたに違いない。なおこの年の夏フライはスペインで美術論 *A Sample of Castile* を執筆、9月から翌24年春までほとんどパリにおり、ロンドンへ戻ってまもなく当時の愛人が自殺したとの報を受けてフランスへ戻り、以降同年秋にかけてフランス各地をスケッチ旅行している。従って徐志摩の手紙(3)もまたロンドン到着後すぐ読まれたとは考えられず、読んだとしてもフライは訪中できるような状況ではなかったと推測される。

フライが訪中しなかったことは、次にあげるジュリアン・ベル(1908-37)の書簡¹³からも裏付けられる。

ロジャー宛の Hsu Tse Mo の手紙を見せてもらったことがあります。マージャーリー [ロジャーの三番目の妹、後述] がコピーをおくってくれたのです。・・・

ロジャーが[中国へ]来なかったのは非常に残念なことです、彼はそれを一つの経験として途方もなく楽しんだろうし、その生活や風景の特質のすべてを享受したでしょうから。ゴールドィ [G・L・ディキンソン] よりもずっと。

徐志摩は1925年夏にイタリア、フランスを周遊しているが、4月8日から10日の間にフライと会ったという[徐の陸小曼宛て書簡1925年4月10日付。『全集』5]。フライの1925年スケジュール帳4月10日の欄には鉛筆でかすかに「Hsu」と走り書きされ、アドレス欄「CD」の項第四ページに「Tsemou Hsu c/o Y. L. Chin 9 du [?] Surrounded Paris」と記されている(図版参照)。



R・フライ1925年のスケジュール帳より。著作権所有者 Annabel Cole 氏の許可による。キングズ・カレッジ・アーカイヴズ所蔵。

手紙(4)は日付不祥だが、1928年8月11日付け徐志摩のレナード・エルムハースト(1891-1974)¹⁴宛て書簡に「来週ケンブリッジを訪れるつもりです。ロジャー・フライがサフォークへ招待してくれました」とあり、以下に引く(4)によれば徐志摩はフライと別れたその足でケンブリッジに向かったらしい。徐志摩の連絡先はケンブリッジ、キングズ・カレッジと記されている。従って(4)は1928年8月11日～8月中旬に書かれたと推測することが出来る。

この手紙があなたが Baytham [不明] を発つ前に届くとよいのですが。私が撮った写真の中でわりと出来がいいものを同封します。・・・私の Baytham 滞在は

大変な喜びで、私のような孤独な旅行者にとって、あなたとアンレブ夫人以上の交友はのぞめません。ケンブリッジを再訪出来て幸せです。・・・

ヴァージニアの『灯台へ』を読み、興味深い以上のものを見いだしています。どうぞ何とか見つけてくれませんか、ロジャー、この美しく繊細な作家の聖堂に拝する機会を。・・・

追伸：アンレブ夫人に報告しなければ、私は粗忽にも小型の傘をケンブリッジに向かう途中、忘れてしまいました。

フライがモザイク作家ボリス・アンレブの夫人ヘレンと同棲し始めたのは26年末からである。V・ウルフの『灯台へ』が出版されたのは1927年、フライはそれをウルフの小説の中でも高く評価していた。¹⁵ 恐らく徐志摩とフライが会った際、ヴァージニアの新作が話題にのぼり、徐志摩はその感想を書き送ったのであろう。

徐志摩とフライとの会見はこれが最後であった。しかし友好関係は続いていたことが、フライの1929年1月12日付アグネス・フライ（ロジャーの妹。1868-1957）宛て書簡¹⁶にうかがわれる。

同封したものは貸し付け（期限なし）で、プレゼントではない、僕のすてきな中国の友人 Hsu 氏にもらったものだから。君は彼の名前を Shu と発音するが ssh を弱くしたような感じだ。それは僕のところより君の刺繍美術館の方がよほどふさわしいと思う。十八世紀の女性のサイン入りだ。何年かははっきりしないが、十八世紀前半のものじゃないだろうか、ある意味で驚異だと思う。君は僕よりももっと驚くべきものを見いだすだろう。

刺繍作品とは、恐らく徐志摩が1928年にフライと会った際土産としたものであろう。また文面から、アグネス・フライも徐志摩をすでに知っていたらしい。先に挙げたジュリアン・ベルの手紙といい、中国人詩人徐志摩はフライ、ディキンソンに近い人々には一通り知られていたと推測される。

3 . 徐志摩へのフライの影響 – 美術普及活動

ケンブリッジから帰国した徐志摩は、翌年には詩、エッセイ、小論、翻訳など 60 編以上を新聞雑誌に発表するなど文筆家として名をはせる一方、文芸欄の主筆を務め、文芸誌を組織するなど編集者としての活躍も目覚ましかった。その文化人としての広い活動の一環に、美術方面の啓蒙がある。

1929 年 4～5 月、国民党政府教育部の主催で第一回全国美術展覧会が上海で開催された。中国で初めて近代的な正規の美術専門学校、上海图画美術院が設立されて 17 年経ったときのことである。この美術展は中国人によるものを中心に絵画、彫刻、建築、工芸を一堂に集めたかつてない規模の美術展であった。徐志摩はその準備会常務委員であり、展覧会開催中に発行された三日刊『美展』編集者の一人であった。¹⁷

『美展』編集者は美術専門学校の教師がほとんどを占めていた。それにもかかわらず巻頭の言である「美展弁言」を徐志摩が執筆しており、画家ではない彼が美術に対する識者として信頼されていたことがうかがわれる。「美展弁言」によれば、美術展開催の主旨は、欧米やソ連に倣って、民衆を良質の美術に触れさせ、啓蒙することであった。

『美展』誌上にて、画家徐悲鴻 (1895-1953)¹⁸ は「我惑[私は困惑する]」(『美展』第 5 期、1929 年 4 月 22 日)を寄稿し、セザンヌを「稚拙」、マティスを「浮薄」、マネを「凡庸」などと批判し、後期印象派の盛況は商業的な画策によるものだと言った。それに対し徐志摩は「我也惑[私も困惑する]」(『美展』第 6 期、1929 年 4 月 25 日)にて、西洋に倣って後期印象派の勃興に盲従すべきでないのは確かだと認めつつも、後期印象派の画家達の美に対する誠実さを説き、彼らが嘲笑され狂人扱いされ、多くが死後認められた経緯をたどり、「今日び中国でこともあろうに君の見解に、悲鴻よ、1895 年以前のパリの反響を見いだすとは」と反論している。これに徐悲鴻はさらに反論し、論争は平行線であった。しかしこの論争には、『美展』読者の美術鑑賞力を高める効果があったと評価された。¹⁹

この美術展覧会より以前、徐志摩は美術論として「-isms」(1925 年、『全集』4)を発表している。その主張は、真の芸術作品とは既製の「～主義」を唱えてそれに束縛されることなく、「注意を君の目と手とに集中させ、内なる芸術に思想を「実現」させるだけでなく、その色あるいは石の上に「活かす」ことだ」

とする。様式に捕らわれず、ただ自分の感受性を信じる芸術家の姿勢を評価するこの主張は、フライの後期印象派に対する評価を受けたものと言えよう。徐志摩は前述の「我也惑」で後期印象派に言及した際も、「Post Impressionism この名詞は英国の批評家フライ氏 (Mr. Roger Fry) が 1911 [ママ] 年に組織した Grafton Exhibition の際、単に印象派以降の数人の画家という意味で間に合わせに付けたに過ぎない、彼らは実のところそれぞれ異なり、流派をなしていたわけでは決してない。しかし後々便宜的にであろうか、使われ続けたのである」と但し書きを付け、フライの命名には派として画する意図がないことを強調している。

徐志摩の美術に関する文章は、彼が発表した 200 編にのぼる散文の中で 6 編のみであり、²⁰ 彼は芸術一般に関わる文化人として美術にも言及したに過ぎない。しかし美術論と銘打っていかなくとも徐志摩の散文には頻りに西洋画の巨匠が登場し、彼が主催した文芸誌『新月』のグラビアには絵画へのこだわりが見られた。『美展』をめぐる徐志摩の活躍から、欧米留学者がごく恵まれたエリートであった当時、彼が西洋芸術に造詣の深い文化人として認められていたことがうかがえる。

この第一回全国美術展覧会は国民党による中央集権を誇示するという政治的な目的を含んでいたとはいえ、中国画、西洋画をともに大規模に収集した展覧会であること、当時は国民政府大学院院長となっていた蔡元培が協賛していることなどが、前節で挙げた徐志摩のフライ宛て書簡 (2) に言及されていたジョイント展覧会に一致する。フライの訪中がかなえば、この美術展覧会にフライが関わっていた可能性があるだろう。

結び - 徐志摩、R・フライ没後の波及

1931 年徐志摩は飛行機の墜落事故で亡くなった。徐志摩と非常に親しかった凌叔華 (作家、中国画家、1900-90) は 1934 年 1 月 3 日、ロジャーの妹マーゼリー・フライに宛てて書いている。²¹

あなたのお兄様のリトグラフ作品をいただいてとてもうれしく存じます。・・・居間に飾るつもりです。友人たちが賛嘆することでしょう。カラーの一枚は Girls Hostel に、もう一枚は私達の学長である王氏 [王世傑] に渡しました。・・・ロジャー・フライ氏に心からよろしく申し上げます。可哀想な Hsu が私の

画軸に彼の絵を持ち帰って以来、フライ氏が私達の旧友のように思われるのです。夫と私からあなたと Miss Michaelis [訪中に同行したマージャリーの友人] へ幸運をお祈り申し上げます。

マージャリー・フライ (1872-1958) はオックスフォードのソマヴィル・コレッジ学長を勤めたことのある教育者、また犯罪被害者の救済に関する社会運動家として知られている。²² 1933年春、彼女は義和団事件後中国から支払われている賠償金を資金として The Universities China Mission により招聘され、北京、上海、南京などの大学で講演し、監獄、工場などを視察した。凌叔華の文面からは彼女と夫・陳源とはM・フライと面識があると推測されることから、マージャリーは恐らく陳源が文学部学長を勤める武漢大学をも訪問したのであろう。独身であったマージャリーは兄ロジャーとしばしば共同生活を送り、精神的に密接なつながりを持っていた。訪中以前の彼女の中国イメージにはロジャーのそれが多大に影響していたに違いない。彼女は中国で快適に過ごし、国家統一に努力する国民に共感を覚えた。²³

この年の9月、ロジャー・フライは転倒したことがもととなり急死した。

一年後ブルームズベリー・グループの二世というべきジュリアン・ベルが武漢大学に英文学講師として赴任し、学部長夫人・凌叔華の世話になる。ジュリアンは母ヴァネッサ宛て 1935年10月23日書簡に書いている。²⁴

このあいだ彼女 [凌叔華] の絵をたくさん見せてもらいました。大部分は画軸で、その一つにはロジャーが Hsu のために描いたものが含まれていました。彼女はロジャーのリトグラフを壁にかけています。

リトグラフ、画軸ともにマージャリー宛て凌叔華の書簡に言及されたものと同じと考えてよからう。画軸は恐らく「友情の画軸」²⁵ と思われ、フライのほか徐悲鴻、張大千 (1898-1986、画家)、林風眠 (1900-91、画家)、陳曉南 (不祥)、聞一多 (1899-1946、詩人)、謝冰心 (1900-99、作家)、豊子豈 (1898-1975、画家) の書画を連ねたものである。林風眠は前節で述べた第一回美術展覧会の準備会委員の一人であり、豊子豈は『美展』編集に携わっていた。この画軸もまた、フライと第一回美術展覧会との関連の可能性を含んでいる。

徐志摩とフライとの交流は、凌叔華と英国とを結び付け、後に彼女は英国に

渡りヴァージニア・ウルフ夫妻、ヴァネッサ・ベルらの助力で自伝をホガース社から出版するに至る。²⁶ 但し、ともすれば凌叔華をブルームズベリー・グループの中国人メンバーであるかのように扱うP・ロレンスの見解には疑問が残る。グループの根幹であったV・ベルが次のように述べているからだ。²⁷

「[アーサー・]ウェイリー²⁸ は明らかに彼女[凌叔華]が好きではなくて、たまたま外国に行こうとしているふりをして二度と彼女に会おうとしません。Old Gumbo [マージョリー・ストレイチャー、リットンの妹。1882-1964] は彼女の感情の豊かさに恐れをなし、彼女がお米をくれたことから、学生として受け入れてくれただけです。幸いクライヴ[・ベル]は彼女を気に入っているし、ダンカン[・グラント]も、実は私もです。でも勿論サークルの仲間として受け入れるのは難しいです。彼女がほんとうに望んでいることはそれなのだけれど。

ブルームズベリー・グループは凌叔華を受け入れ難かったらしい。

しかしいずれにせよ、ケンブリッジ留学に由来する徐志摩とフライとの個人的交流は、1920年代中国における西洋美術受容に貢献するとともに、中国とブルームズベリー・グループとの半世紀に跨がるつながり²⁹ に派生していったと言えよう。

注

- 1 ケンブリッジに対する徐志摩の傾倒は中国では有名であり、例えば『跟徐志摩去流浪：英倫文学飛翔版図 [徐志摩とさすらう：飛翔する英国文学地図]』（謝金玄、台北青新出版有限公司、2001）『与徐志摩遊欧州 [徐志摩と旅するヨーロッパ]』（張寄波編、四川美術出版社、2002）など徐志摩にことよせた観光ガイドブックでもそれぞれケンブリッジについて一章が割かれている。
- 2 ブルームズベリー・グループは1904-14年にロンドン、ブルームズベリー地区のステイブンキョウだい（ヴァネッサ、トウビー、ヴァージニア、エイドリアン）宅に集ったケンブリッジ大学学生たちを発祥とする知識人グループ。主要メンバーには美術評論家クライヴ・ベル（ヴァネッサと結婚）、経済学者M・ケインズ、L・ウルフ（ヴァージニアと結婚）、作家L・ストレイチャー、画家ダンカン・グラント、

- 作家 E・M・フォースターなどがいる。(Bell, Q. *Bloomsbury*. Weidenfeld and Nicolson, 1968)
- 3 Laurence, P. 2003, *Lyly Brisco's Chinese Eyes: Bloomsbury, Modernism and China*, The University of South Carolina Press, p.362.
 - 4 Leung, Gaylord Kai Loh (Liang Hsi-hua). *A New Biography of Xu Zhimo*. 2nd ed. Taipei: Lien Qing, 1994. 筆者は未見だが、梁錫華(中国ローマ字表記 Liang Xi-hua)『徐志摩新伝』(萬豊出版社、1979)と同じものではなかろうか。後者は英国知識人と徐志摩との交流を詳しく記述しているが、根拠がしばしば不明である。
 - 5 拙稿『徐志摩と新月社 近代中国の文芸的公共圏』(コンテンツワークス、2002)で詳述した。本稿では英語、美術教育に即した部分のみ述べる。
 - 6 英語授業の内わけは徐志摩「受課時刻表(一)」(『徐志摩未刊日記』北京図書館出版社、2003。p.63)に因った。それぞれ教師は会話が許、リーダーが戴、文法が唐と姓のみ記されている。
 - 7 徐志摩「府中日記」1911年2月20日付に次のように記す。「包先生の画はすこぶる高雅であるが、毛筆画のみで、鉛筆画ははるかに劣る」(前掲『徐志摩未刊日記』、p.19)。
 - 8 徐志摩は1915年親同士の取り決めにより張幼儀と結婚。彼女の兄張君励(1887-1969、英語名 Carsun Chang)は早稲田大学、ベルリン大学に留学、政府の要職についたのち教授職に付いていた。徐志摩を梁啓超に紹介したのも彼である。
 - 9 徐志摩「我所知道的康橋(一)」(1926年執筆、『全集』4) p.135。
 - 10 Chang, P. *Bound Feet and Western Dress*, Doubleday Dell Publishing, Inc. 1996, p.90.
 - 11 フライの伝記的事項については Spolding, F., *Roger Fry: Art and Life*, Black Dog Books, 1999 および Woolf, V. *Roger Fry: A Biography*, The Hogarth Press, 1940 に拠った。
 - 12 Q・ベルはブルームズベリー・グループ内部で育った立場からその初期メンバーを図表化しているが、その図で S・ウォーターロウの名は R・フライに隣接して位置している (Bell, Q. *Bloomsbury*, p.15.)。
 - 13 J・ベルはヴァネッサ・ベルの長男、成人後は年齢差を超えてフライの友人であった。1935-37年武漢大学英文学教授を勤める。引用した書簡は1936年10月1日付 V・ベル宛、Bell, J. *Essays, Poems and Letters*, edited by Quentin Bell, 1938, The Hogarth Press, p.160. なお、徐志摩の名前は本では「Shu Tse Mo」とされているが、筆者が現物を見たところでは「Hsu tse-mou」と記されている。

- 14 『補編』4、p.187. エルムハーストは英国人、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ出身。詩人タゴールのもとインドの農村復興研究所を主導（コクス、P「タゴールとエルムハースト - イギリスに生きるタゴール精神」森本達雄訳、『タゴール著作集 別巻タゴール研究』1986所収）。1924年タゴール訪中の際秘書をつとめたことから、中国側の通訳を務めた徐志摩と知り合う。
- 15 Spolding, F. *Roger Fry: Art and Life*, p.244.
- 16 *Letters of Roger Fry*. Vol.2 (1913-1933), edited with an introduction by Denys Sutton, 1972, Chatto and Windus, London, p.634. 本文「Hsu」付注に「C. H. Hsu」、これはキングズ・カレッジ入学許可時に徐志摩が名乗っていた「Changshu Hamilton Hsu」を指す。
- 17 徐志摩と第一回全国美術展覧会については拙稿『徐志摩と新月社』(前掲)pp.41-43で述べたことがある。本稿ではR・フライに寄せて書き直した。
- 18 徐悲鴻は二十世紀中国を代表する画家の一人。欧州で絵を学び、洋画、中国画ともに長けていた（廖静文『徐悲鴻』中国青年出版社、1993）。現在北京に個人美術館がある。
- 19 『美展』編集者の一人楊清磐（1898-1957、画家）は「惑後小言[困惑後の寸評]」（『美展』増刊号、1929年5月10日）にて、この論争が「民衆に相応の芸術理解力を与え、熱い情熱を湧かせ、内心の要求を与えた」と評している。
- 20 本文に挙げた3編の外、「Art and Life」(1923年、『補編』3)、「海粟的画」(1927年、『補編』3)、「想像的与論」『美展』第2期、1929年4月13日)。
- 21 ケンブリッジ大学、キングズ・カレッジ・アーカイヴズ所蔵。
- 22 Jones, E. H. *Mergery Fry: The Essential Amateur*, 1966, Oxford University Press, London.
- 23 Jones, *Mergery Fry*, pp.175-176.
- 24 Bell, *Essays, Poems and Letters*, p.51.
- 25 恐らく、Laurence, P. 2003, *Lyly Brisco's Chinese Eyes* のカラーページに所収の Ling Shu-hua's Friendship Scroll を指す。フライのものはインクによる風景画。
- 26 Ling Chen, S. *Ancient Melodies*, The Hogarth Press, 1953.
- 27 ヴァネッサ・ベルのアンジェリカ・ガーネット [ヴァネッサの長女、ジュリアンの妹、1918-]宛て書簡 1947年9月14日。 *Selected Letters of Vanessa Bell*, pp.512-513.
- 28 A・ウェイリー（1889-1966）、日本文学者、中国文学者。注26に挙げる凌叔華の自伝の題は、ウェイリー訳白居易の詩 *The Old Harp* の一節をとったもの。前掲 Bell, *Bloomsbury* ではオリジナルのブルームズベリー・グループとは見なされていないが、

V・ベル、R・フライらと友人であった。『補編』4は徐志摩のウェイリー宛て書簡一通（1924年2月21日付）を収録、それによればG・L・ディキンソンの紹介で徐はウェイリーを知り、文通があったらしい。

- 29 凌叔華とV・ベルの交友はヴァネッサの晩年まで続いた（凌叔華とのV・ベル宛て書簡、1960年10月7日付け、ケンブリッジ大学、キングズ・カレッジ・アーカイヴズ所蔵）。